

重制度としての志向性

『ウィトゲンシュタインはこう考えた』をもとに

小川 祐輔

はじめに

L. ウィトゲンシュタインは、私にとって、近寄りがたさを感じさせる哲学者であり続けてきた。私は大学1年次にふれた分析哲学——そこでは、（もちろん一面的な言い方ではあるが）心や言語、知識といったものの本性について理論的な探究がなされている——への興味から哲学専攻に進んだのだが、そうした私にとって、哲学的な理論構築に反対しているとか、哲学の仕事を治療と捉えているとかといった、いわゆる後期ウィトゲンシュタインにかんする風評は、彼を毛嫌いさせるのに十分なものであった。また、彼の後期思想の結晶である『哲学探究』に直接当たってみても、各節で議論されている問題自体がうまく同定できず、結局有意な収穫を得ることはなかった。そうして私は、なんとなく嫌なことを言っている哲学者という印象（本当にたんなる印象以上のなにものでもないもの）を残したまま、彼とは距離をとりながら分析哲学に従事する方に流れていった。

しかし、鬼界先生の授業で『哲学探究』を再度読むようになってから、ウィトゲンシュタインにたいする私の見方は決定的に変わってきたように思われる。鬼界先生が再構成するウィトゲンシュタインは、私が関心をもっているまさにそのトピックについて、広く行き渡った見解にたいする有意義な批判を、説得的に突き付けてくるのである。『哲学探究』と向き合うのは相変わらず困難な作業ではあったが、それでもそれは、ただ難解なテキストを目的も不明確なまま読むというものではなく、そこに隠れている洞察を掘り起こすことへの期待を伴うものになったのである。

さて、前置きが長くなってしまったが、鬼界先生の退職を記念する本稿では、以上のような私自身の経緯をふまえつつ、次のように議論を進めたい。まず第一節では、意図 (intention) という心的状態にかんするウィトゲンシュタインの見解を、『ウィトゲンシュタインはこう考えた』における鬼界先生の解釈に全面的に依拠しながら再構成する（なお、本稿における同書への参照はすべてページ番号のみを記載する）¹。次

に第二節と第三節では、そうしたウィトゲンシュタインの心の哲学が志向性（intentionality）の問題に与える影響にかんして、鬼界先生の議論の意義を明らかにした後、その主張に多少の疑問を投げかける。

意図にまつわるウィトゲンシュタインの議論は、鬼界先生の授業をとおして私がとりわけ興味を惹かれたものである。また、志向性の問題は現在私が独自に（つまり、ウィトゲンシュタイン以外の哲学者をとおして）研究しているものの一つである。『ウィトゲンシュタインはこう考えた』における志向性論は（いわば）補遺のような位置づけにあり、それゆえ本稿の議論が鬼界先生の関心にどの程度適うか不安がないではないのだが、それでもこれが私になしうる貢献としては最適なかたちだと信じている。（なお、次節以降では基本的に敬称を省略させていただく。）

1. 意図の重制度性

さて、本節では意図にかんするウィトゲンシュタインの見解を確認していくが、そのための導入として、まずは次のような場面を考えてみてほしい。

今あなたは自分の子供を紹介するため、子供と一緒に友人宅に遊びに来ている。あなたは子供と友人の交流を促すべく、友人に「うちの子となにかゲームでもやってあげてよ」と言う。友人は、「お、いいね」と快く引き受けたかと思うと、おもむろにサイコロを取り出し、子供にサイコロ賭博を教え始める。あなたは慌てて友人を制止し、「そんなゲームをやって欲しかったんじゃない」と苦言を呈す。しかし、友人はキョトンとした様子で次のように返してくる。「でも君は「ただしサイコロ賭博は除く」って言わなかったじゃん。それとも、口に出さなかっただけで、心の中で念じたりしてたの？」実際、あなたはサイコロ賭博の類は教えないでほしい旨を念じてさえいなかった（としよう）。しかしそれでも、あなたの苦言はあなたの意図を正しく表明したものであるように思われる。だが、繰り返すが、あなたの心の歴史をたどってみても、友人が要求するようなものは存在しない。では、あなたの正しさは一体なにによって担保されているのだろうか。そうした確たる証拠がないのなら、あなたに友人を責める資格などないのではないか。

以上は、ウィトゲンシュタインが『哲学探究』で提示しているパラドクス（に少し脚色を加えたもの）である（Wittgenstein 1953, p. 38）。ここでの彼の問題提示は非常に巧みで、おそらくあなたも、この場合、私はサイコロ賭博の類を除く意図などもっ

ていなかったのかもしれない、という考えに誘われたことだろう。しかしもちろん、ウィトゲンシュタインはそうした考えを勧めようとしているのではない。そうではなくて、「常識〔すなわち、上のストーリーにおいてあなたはちゃんと問題の意図をもっていたのだ、とする見方〕が正しい、しかし常識的『意図』概念が間違っているため、常識は自分の正しさを説明できない」（p. 331, 中括弧は引用者、以下同様）というのが、彼がこのパラドクスから引き出す教訓なのである。

今一度上のストーリーを見返してみていただきたい。ここであなたの友人は、あなたに問題の意図があったことの証拠として、（内言語のようなものであれ、より感覚的なものであれ）あなたが有した意図体験の存在を要求していた。これが鬼界の言う「常識的『意図』概念」であり、ウィトゲンシュタインがパラドクスの根を見てとる部分である。たしかに感覚経験や知覚経験、思考といった心的出来事の場合は現象的な体験が伴うし、そうした体験の存否が心的出来事それ自体の存否を左右する。しかし意図のような心的状態の場合はそうではない。つまり先のパラドクスは、意図という心的状態を心的出来事の一つとみなすカテゴリーミステイクの産物だったのだ——というわけである²。

かくして意図にかんする大きな誤解が払拭された。あなたが先のストーリーから反常識的な考えに惹かれていたとすれば、それは（多かれ少なかれ）この誤解を有していたからだろう。しかし同時に、ここまでではまだ意図がなにでないかという消極的なことしか明らかになっていない。なぜ意図は特定の体験なしに存在しえるのだろうか。個人の体験でないとしたら、いったいなにが意図の存在を支えているのだろうか。こうした問いに説得的な答えを与えないかぎり、本当の意味でパラドクスを解消したことにはならない。それゆえ、ここで折り返してウィトゲンシュタインの積極的な見解を見ていこう。そのさいにカギとなるのが、「意図と意味の重制度性」（p. 331）という概念である。

「言語が制度である以上、言葉によって名指される諸概念は〔心的なものも含めて〕制度的性格を持っており、言語という制度の外部においては意味を持たず、存在もしない」（ibid.）と鬼界は言う。思考や痛みのような一見ごく私的にみえる心的出来事であれ、それらは、人間が思考や痛みといった概念を使って生きる制度的環境のなかでのみ意味をなす³。その意味で心的諸概念はいずれも制度依存的なのだが、しかし鬼界によれば、意図という概念はさらにもう一段、私たちが置かれた具体的な状況にも依存しているのだという。

この点にかんしては、鬼界がしばしば例に出す殺意について考えてみるのが最適である（pp.333-4）。ある人が殺人の罪に問われているとき、彼（としよう）の殺意の有無を知るために、私たちはなにをやるだろうか。まずは凶器や計画の有無を調べるだろう。また、故人とのトラブルの有無なども重要な判断材料になるだろう。仮に彼が犯行直前に激しい怒りを覚えていたとしても、上述の類のものがいっさい見当たらないなら、私たちは彼に殺意を認めるのをためらうだろう。逆に、もし彼が内面では落ち着いていたとしても、金銭トラブルの末に計画的に犯行に及んだことが判明したなら、私たちは彼に明確な殺意を認めるだろう。これらのことが教えるのは、殺意の有無は彼の内的体験の有無や程度の問題ではなく、彼の言動や周囲との関係性などから総合的に判断されるものだ、ということだ。これが鬼界の言う意図の状況への依存性であり、ウィトゲンシュタイン本人の言葉を使って言えば、「意図はその状況の中に、人間の習慣・制度の中に埋め込まれている」（Wittgenstein 1953, § 337〔邦訳, p. 216〕）のである。

以上が、ウィトゲンシュタインおよび鬼界が提示する意図の本性である。そしてこれをふまえるなら、本節冒頭のパラドクスもすっきりと解消されるだろう。あなたが賭博——とりわけ、子供を賭博に触れさせること——に否定的であることが状況に照らして十分に明らかなら、あなたの訴えは友人その他にたいして力をもつ（だが、もしあなたが賭博狂であったりしたら、おそらく事情は異なるだろう）。これこそが、あなたが意図を有しているということなのであり、私たちの生きる意図概念は現にこうした仕方では機能している。それゆえ、さらなる根拠を体験に求めるのはお門違いなのである。

2. 志向性とはなにか、なぜそれが哲学の問題になるのか

前節で概観したウィトゲンシュタインの意図観、とりわけ意図の重制度性という着眼点は、私の目から見ても非常に説得的なものである。しかし鬼界によれば、こうした意図についての分析は、さらに伝統的な志向性の問題にたいしても決定的に重要な貢献をなすのだという。序論でもふれたとおり、志向性は私自身も現在おおいに興味をもっているトピックである。それゆえ以下では、鬼界の議論に依拠しながら、ウィトゲンシュタインの志向性の哲学について論じてみたい。

まずは志向性というものについて簡単に確認するところから始めよう⁴。これは鬼

界が言うように「何かが何か別のものに関わる、という性質であり、規定しがたい性質として多くの哲学的探究の対象となってきた」(p. 335)。そうした志向性をもつとされるのは、絵や文字のような物的表象と、前節でとりあげた意図をはじめとする私たちの心のありさまである。たとえば「富士山の標高は 3776 メートルである」というこの印刷されたインクの染みは、静岡県と山梨県の県境にあるあの山の標高についての (about) 事実を伝えている。また、この事実に関心が思いを巡らせるとき、私たちの思考はやはりこの事実に向けられている (directed)。これが志向性の典型的な事例であり、それゆえこの性質はしばしば、「about-ness」や「directed-ness」と呼ばれている⁵。

では、どうしてこの性質は「規定しがたい」のか。それはなにより、この性質がもつ規範的な性格に帰されるところが大きいだろう。上で例に出した富士山についての文ないし思考は、富士山が本当に 3776 メートルなのか否かに応じて正しかったり間違っていたりする。また、なにか甘いものが食べたいという私の欲求は、私が実際に甘いものを食べられるか否かに応じて実現されたりされなかったりする。J. サール (Searle 1983) にならい、志向的なアイテムが指定するとおりの事態が生じ(て)いることをひとまとめに「充足 (satisfaction)」と呼ぶなら、志向的なアイテムはすべてその充足条件によって規定される内容を有している、という言い方ができるだろう。富士山についての思考は〈富士山が 3776 メートルである〉という内容を持ち、私の欲求は〈私が甘いものを食べる〉という内容をもつ、というわけである⁶。

ここで強調しておくべきは、志向的なアイテムと充足条件のあいだの関係は必然的なものであって、偶然的なものではない、ということである。たとえば、私が甘いものの代わりにポテトチップを食べ、結果的に心理的な満足を得られたとしよう。果たしてこれは、甘いものが食べたいという欲求が充足されたということだろうか。明らかにそうではない。甘いものが食べたいという欲求は、甘いものを食べることでしか充足されえない。これが志向的な関係は必然的な関係だということの意味であり、志向性をもつ規範的性格もそれに準ずるものとして理解されねばならないのである⁷。

それでは、こうした規範的な関係の捉えがたさを見るために、ここであえて志向性をなにか他の関係に訴えて(すなわち還元的に)説明することを試みてみよう。たとえば、物的表象の代表である絵画や写真が志向性をもつことに着目し、そうした表象とモデルのあいだの類似性に志向性の源泉を求めたくなるかもしれない。すなわち、表象が描写するものに類似した事態がその表象の充足条件となる、という発想だ。し

かしこの説明は明らかにうまくいかない。鬼界が指摘するように、この説明では「似ていない肖像画、下手な肖像画が存在する」（p. 335）という明白な事実を認めることができない。しかし同時に、あらゆるものは多かれ少なかれなにかしらのものに似ている、という逆の問題もある。たとえば私が書き損じてノートに引いてしまった赤い線は（ある意味では）東京タワーに似ているが、もちろん両者のあいだに志向的な関係はない。このように類似性は、仮に絵的な表象に話をかぎったとしても、志向性を説明するための候補としてはまったくもって不適格なのである（cf. Putnam 1981, chap. 1）。

次に考えられるのは因果関係に訴える説明戦略だろう。つまり、心のありさまであれ物的表象であれ、それを因果的に引き起こすものをその充足条件とみなしてはどうか、というわけだ。しかしこの戦略は、J. フォーダー（Fodor 1987, chap. 4）が手際よく示したように、ただちに困難に直面する。たとえば、「私の目の前にウシがいる」という文で表現される私の思考は、ウシによってもウマによっても引き起こされる（そしてそれ以外によっても引き起こされない）のだとしよう。もしこの思考が私の目の前にウシがいるという事態を充足条件とすべきものであるなら、この思考がウマによっても引き起こされた場合、それは間違いなのだとさえねばならない。しかしこの要請は、原因を充足条件とみなすという目下の方針と真っ向から対立するものだろう。この方針に忠実であろうとするなら、私の思考の内容はむしろ、〈私の目の前にウシがいる、あるいは私の目の前にウマがいる〉という、すべての原因を選言的に羅列したものにならざるをえない。しかしこれは、志向性の本質的特徴である規範性を放棄することに他ならない。この選言的内容は（目下の想定のもとでは）間違いとなることがありえない。そして間違いの可能性がないところでは、正しいということもまた意味をなさないのである（cf. Wittgenstein 1953, § 201）。

以上の議論はきわめて手短なものだが、志向性が捉えがたいと言われる理由の一端は十分に示すことができたと考える。このように志向性は、他のなにものにも代えがたい独自の仕方での心のありさまや物的表象をその充足条件へと結びつける。繰り返すなら、志向的な関係とは、その充足条件が必然性の問題として定まっている一方で、（原因と結果のあいだの結びつきの強さとは異なり）充足されないこともありうるような関係なのである。そしてこの独自性は、どうしてこのような関係がこの自然的世界に成り立っているのか、という疑問を喚起するのに十分なものである。実際、哲学者のなかには、他に居場所がないとの考えから志向性を私たちの心のみがもつ特別な

力として理解するものや（この場合、物的表象の志向性は二次的なものとみなされる。cf. Searle 1983）、そのような力は魔術的で信じがたいと考え志向性のリアリティを格下げするもの（cf. Quine 1960）が見られるのである。おそらくウィトゲンシュタインもこうした一連の問題に考えを巡らせたのであろう。彼の次の一節は、彼が志向性の不思議に強く印象づけられたことを物語っている。

願望は、みずからを充足するであろうもの、充足するはずのものを、すでに知っているように見えるし、命題ないし思想は、みずからを真たらしめるものを、たとえそうしたものがまったくそこに存在しないとしても、すでに知っているように見える！まだそこに存在しないものを、このように決定するということは、なにに由来するのか。この専制的な要求は[何に由来するのか]。（Wittgenstein 1953, §437 [邦訳, p. 257, 四角括弧は邦訳者]）

志向性についての正しい理解を提示し、これまでに見てきた捉えがたさ、不思議さを満足のいく仕方で解消すること——最大公約数的な言い方をすれば、これが志向性の問題だということになるだろう。それでは、第一節で概観した意図についてのウィトゲンシュタインの見解、とりわけ重制度性という概念が志向性の問題にたいしてもつ意味について、節を移して検討したい。

3. 重制度という概念は志向性の問題をどこまで解決できるのか

鬼界によれば、「意図と意味が状況の中に埋め込まれている、というウィトゲンシュタインの洞察は、志向性を求めた哲学者たちの長く真剣な探究を、一瞬にして探究のパロディーに変えてしまう」（p. 336）のだという。この評価にたいして私は後に「待った」をかけるつもりではあるが、ウィトゲンシュタインの心の哲学が志向性の解明において非常に大きな役割を果たすということには同意である⁸。

さて、ウィトゲンシュタインの功績として私がまず指摘したいのは、重制度性という概念はたしかに志向性のもつ規範性をうまく捉えている、ということである。第一節で見たような仕方でその有無や内容が判定される意図は、明らかに、因果的・機械論的な仕方でその充足条件へと結びつくようなものではない。たとえば、サイコロ賭博の例を再び用いて、次のような場面を考えてみよう。すなわち、状況に鑑みてあな

たにはサイコロ賭博を除く旨の意図がしっかりと認められるのだが、あなたは持ち前の気の弱さのせいなどでそれを友人に伝えられずに終わった、という場面である。状況への依存性を複雑かつ総体的なものとするウィトゲンシュタインの見解はこうした可能性を許容するが、これはまさに、充足されないこともありうるという意図の本性（すなわち、上で述べた意味での規範性）に適切な位置を与えるものだろう。

しかしだからといって、あなたの意図とサイコロ賭博の排除との内容上の結びつきを偶然的なものにしてしまうような含意は、ここにはない。意図の状況への依存性を訴えるウィトゲンシュタインの見解に基づくなら、むしろ、充足条件と本質的な結びつきをもたない意図という考えこそ理解しがたいものとなるのである。もちろん、第一節でも殺意という慎重な検討を要する例を引き合いに出したように、意図の有無や内容、強度などの判断が難しいという場面は多々あるだろう。しかしながら、この意味で意図には曖昧なところがありうるということは、ひとたび認められた意図とその充足条件のあいだの必然的な結びつきを損なうものではない。

さらにつけ加えておこなうなら、重制度性という概念には還元主義的な含意も超自然主義的な含意もない。それは私たちの生物学的な特性と共同体的な実践の双方に根をもつものであり、心が心であるだけで備えうる特別な力のようなものを要請するものでも、規範的・非志向的なレベルの外側からの説明を提供するものでもないのである。鬼界によれば、数学や論理学の必然性・規範性と自然主義的な見方を調停するということがウィトゲンシュタインの後期思想の大きなテーマになっているそうだが（pp. 291–301）、このことは彼の志向性論にも等しく当てはまると考えられる。

さて、このように意図の志向性についての説得的な理解を提供したことで、ウィトゲンシュタインの見解はさらに二つのことを達成していると言えるだろう。そのうちの一つ目は、物的表象の志向性を意図の問題とみなすことで、関連する問題を一挙に処理していることである。この点にかんしては、鬼界自身の言葉を引用しよう。

〔絵画の志向性は〕結局は画家の意図の問題なのである。〔……〕言葉や表象が持つ「について」という性質は、意図と意味が重制度的であるのとまったく同じ意味で重制度的なのである。志向性を本質とする記号や表象は、貨幣と同様に制度なのである。（p. 336, 強調は原著者）

そして二つ目は、意図と同じく重制度的であると鬼界が言う他の心の志向性について

ても、有望な解明の筋道を与えている、ということである。鬼界によれば、そうした心的状態には信念、希望、期待といったもの（私が心的状態と呼んできたもの）が含まれる（p. 335）。もちろん、これらの心的諸状態が属する具体的な制度は互いに、また意図のそれとも異なると考えられ、それゆえ詳細な理解を得るためには個別的な検討が不可欠である。しかし重制度性という概念が意図の志向性の分析に有効であったことに鑑みるなら、これらの心的状態が志向性をもつという事実そのものに謎を感じる必要はもはやなくなるだろう。

以上論じてきたように、私はウィトゲンシュタインの見解は志向性の問題の解決に大きく貢献するものだと考える。私なりにまとめてみるなら、彼の見解を志向性論として興味深いものに行っている特徴は、(1) 心的状態の状況への依存性というアイデアによって、志向性の問題の根本にある疑問——すなわち、どうして存在論的に独立した二つのもののあいだに必然的な結びつきがありうるのか、というもの——が発生する素地そのものを消去してしまったこと、そして (2) 問題の依存性を、神秘主義と還元主義的自然主義のあいだを行くような仕方¹で描いてみせたこと、これら二点であるように思われる。

しかし同時に、以上をもって万事解決とすることはできないとも私は考えている。というのは、これまでの議論がカバーしているのはあくまでも心的状態と物的表象の場合のみであり、心的出来事——思考のように現象的な体験を伴う心のありさま——の志向性については、まだ具体的な提案がなされていないからである。

だが、それがどうして問題なのか。第一節で言及したように、鬼界はすべての心的概念を制度的なものとみなしている。すると、心的状態の場合の自然な延長で心的出来事も処理できるのではないか——このように言われるかもしれない。しかしながら、心的出来事の場合はもう少し事情が複雑だと考える理由がある。そしてこの点にかんしては、鬼界の以下の発言のなかに重要な手がかりが含まれている。

たとえば〔……〕「昨夜三時から二時間もウィトゲンシュタインについて考えた」といった文の真偽は、たとえば、そう言う当人にその時間に事実そのようなことが起こったか、そうしたことをしていたか、をたずねることによって判断できる。それは〔……〕「思考」は他から独立した話者個人に関わる現象であり、一定の経験的基準によってある程度まで同定できるからである。（pp. 331-2）

ここで注目したいのは、思考が（意図とは違い）状況から独立した出来事だとされていることである⁹。実際、思考に従事しているとき、私たちは（多かれ少なかれ言語的なかたちをした）現象的な体験をもつ。そしてこうした体験を状況から独立したものとみなすのは、たしかに自然である。だが、上で意図についてのウィトゲンシュタインの見解の成果を要約したさいに述べたように、心のありさまがその充足条件から存在論的に独立しているという考えこそ、志向性の存在にたいする懐疑をもたらす要因に他ならない。第一節で見た意図についてのパラドクスは意図に体験が不要であることから生じたわけだが、そのおかげでと言うべきか、この場合には意図の重制度性という発想によって心と世界のあいだのギャップが比較的すんなりと埋められた。しかし思考の場合、その存在論的独立性が強く示唆されることによって、志向性の存在を謎めかせるギャップがより強固なものになっていると考えられるのである。

こうした事態をさらに厄介にしているのが、思考するとき、私たちにはその内容がよく分かっているということだ。あるいはもう少し踏み込んで言うなら、思考という出来事は——たんなる無意味な文字列を思い浮かべることや、痛みのような非志向的な感覚とは異なり¹⁰——しっかりと志向性を帯びたものとして体験されるように思われるのである。注意しておくなら、ここで私が導入した直感は、思考体験の現象学はそれ単体で、他のなにものも前提せずに思考の志向性を定めることができる、といったような強い（おそらくは強すぎる）主張ではない。というのは、それはあくまでも思考体験にとって志向性は内的だと述べているだけであって、そうしたこと（が事実だとして、それ）をなにが実現しているのかにかんしてはオープンだからだ。しかし前段落で見た思考体験の存在論的独立性は、このレベルの直感さえ掘り崩しかねないように思われる。私の考えでは、ここに重制度性という考えだけでは答えの出ない、思考（ないし心的出来事）の志向性に独特な問題がある。そしてウィトゲンシュタインが以下のように言うとき、私には、彼もまた同じ問題に直面していたのではないかと思われる。

「思考、この不思議なもの」——しかし私たちが思考しているとき、それが不思議であるようには思われない。私たちが思考しているときには、思考は神秘的であるようには思われないのだ。しかし「一体どうしてそんなことが可能だったのか」と（いわば回顧的に）言うときにのみ〔思考は神秘的であるように思われるのである〕。思考がその対象それ自体を扱うなどということが、どうして可能な

のだろうか。私たちは、あたかも思考によって実在を網の中に捕えているかのよう
に感じるのである。(Wittgenstein 1953, § 428)

本節後半部の議論をまとめよう。思考は(意図とは異なり)具体的な体験からなる
出来事である。この事実は、思考体験がその充足条件から存在論的に独立したもので
あることを強く示唆する。しかしながら、こうした心と世界のあいだのギャップは志
向性の問題に燃料を投下する。そして厄介なことに、思考についての私たちの直感に
よれば、思考の志向性はたしかに思考体験の中にあるように思われるのである¹¹。

さて、以上の問題にたいしてウィトゲンシュタインはどう答えるのだろうか。「内
容主義的意味概念から機能主義的意味概念への転換」(p. 246, 強調は原著者)や、「言
葉の意味や理解は心の中で起こるいかなる出来事でもない」(p. 269)という計算主
義批判¹²が帰されていることに鑑みると、鬼界の解釈するウィトゲンシュタインは、
私の言う「直感」を否定する方に進むのかもしれない(cf. Philie 2016)。たいして J.
マクダウェルは、問題の直感是我たちの常識的な思考理解の一部だとして、ウィトゲ
ンシュタインの静寂主義がそれを否定するはずはないと考えている(e.g. McDowell
1998, part 3)。

果たしてどちらの線でのウィトゲンシュタイン解釈が正しいのだろうか。また、哲
学的に言ってどちらの見方が正しいのだろうか。これらの問題についてさらに掘り下
げるのは、本稿の範囲をはるかに越えることである(そして前者の問いにかんしては、
私は具体的な提案ができる位置にいない)。しかしながら、(話を後者の問いに限っ
たとして、)ここに容易ならざる問題が残っているということは、示すことができた
のではないかと思う。哲学的なデバンキングがなされるにせよ、なんらかの仕方そ
の正しさが示されるにせよ、渦中にある直感自体は人口に膾炙するものなのだ。哲学
者が志向性の問題を長きにわたり探究してきたのには、それ相応の理由があったのだ
——私としてはこう主張したい。

結語

以上、『ウィトゲンシュタインはこう考えた』に依拠しつつ、ウィトゲンシュタイ
ンの意図論と志向性論について論じてきた。志向性というトピックは、今なお心の哲
学を主な舞台として盛んに論じられているのだが、ことウィトゲンシュタインの見解

を議論の土俵に乗せようとする本格的な試みとなると——Kripke 1982 のような懐疑論的なものを除けば——Thornton 1998 やマクダウェルによる一連の論考しか私は知らない(しかも、それらですら十分注目されているとはいえないように思われる)。しかし今や明らかだと思うが、これは非常にもったいないことである。

鬼界先生の近著(鬼界 2018)によれば、先生は今後、ウィトゲンシュタイン哲学の各論を扱う著作をシリーズとして出版されるそう。そのなかに今一度、今度は主題の一つとして志向性の問題が組み込まれることを、私は密かに期待している。(とはいえ、これは勝手な期待である。)いずれにせよ、鬼界先生の今後の研究のさらなる発展をお祈りし、挨拶とさせていただきます。大変お世話になりました。

¹ 特別な言及がないかぎり、本稿で私がウィトゲンシュタインの見解と呼ぶものは、すべて鬼界の解釈を通したそれ(だと私が理解しているもの)である。

² 心的出来事と心的状態の区別については、たとえば Crane 2001, chap. 2 を参照。

³ この点にかんする詳細については、『ウィトゲンシュタインはこう考えた』の第四部を参照されたい。

⁴ あらかじめ述べておけば、志向性についてのここでの論述は、とりわけ Thornton 1998; 2004 に大きく依拠している。

⁵ ちなみに、「aboutness」と「directedness」という二つの呼称は、同じものを指す二つの表現であり、そこに有意な違いはない。本文中の記述は、物的表象の場合は前者で心的なものの場合は後者、という印象を与えるかもしれないが、そういったことはない。

⁶ 厳密に言えば、一部の心のありさまがもつ志向性の充足条件は、ただ特定の事態を指定するだけでなく、(その内実がどのようなものであるにせよ)そうした事態が当の心のありさまに基づく行為によってもたらされることまで指定する(cf. Searle 1983)。その典型は意図なのであるが、たとえば手を上げようという私の意図は、なにかの拍子に手が上がってしまっただけでは充足されず、私が意図的に手を上げたときのみ充足される。また、おそらくは同じ理由から、私たちには宝くじを当てようと意図することはできないように思われる。

⁷ そしてもう一点つけ加えておくと、志向性論の文脈で問題になる規範性は、善悪にかかわる道徳的なものとは分けて理解されるべきである。ここでの規範性を「意味論的」と形容することもできるが、冗長になるため控えておく。

⁸ 鬼界自身の論述からは、鬼界が志向性の問題をもっぱら物的表象のみにかかわるものとして理解していることが示唆される。しかしこの点についてはここで指摘するにとどめ、本文中では、鬼界のウィトゲンシュタイン解釈が志向性論にかんして有するリソースに注目したい。

⁹ しかし同時に、引用中に「ある程度まで」という表現が見られることにも注意が必要である。今回私はこの点にかんする鬼界の具体的な考えを見出すことができなかったが、それ次第では、以下の私の議論は外的外れなものになるかもしれない。

¹⁰ 感覚に志向性があるか否かが一つの争点になっていることは承知しているが(cf. Crane 2001, chap. 3)、ここではそれに踏み込まない。

¹¹ ここでは、現象的な体験の観点から思考の存在論的独立性やそれにまつわる志向性の問題について論じてきたが、鬼界がしばしばしているように脳内プロセスに視点を移したとしても(e.g. p. 332)、本質的な論点はそのまま保存される。というのは、脳は紛れもなく一個の物的対象であり、それゆえ——サールが力説するのに反して——脳内プロセスと世界のありさまの

あいだに本質的な結びつきがあるとは到底考え難いからである。D. デネットの言葉を借りれば、脳は「統語論的エンジン」であって、「意味論的エンジン」ではないのである (Dennett 1982, p. 26, 強調は原著者)。

¹² ところで、鬼界はここで、計算主義を「言葉を理解するとは、言葉を見たり聞いたりするその瞬間に、心の中で心的な計算作用をすることである」(p. 269) と特徴づけたのち、計算主義の放棄を本文中で引用した考えへと接続している。しかしこの推論は適切なのだろうか。この推論が適切であるためには、〈心の中で起こる理解は(もしあるとしたら)すべて瞬間的な計算作用である〉といった前提がもう一つ必要だろう。だが、私はこの前提がどこで正当化されたのか分からなかった。こう主張する立場はもちろん存在するが、それに心的な理解という考えを独占させる必要はないのではないだろうか。たとえば、十分に習得した言語による発話を耳にすると、私たちは〈意味を聞く〉とでも呼ぶべき経験をもつ。つまり、発話の意味が知覚レベルで理解されるのである (cf. McDowell 1987)。こうした経験を心的な計算とみなすのは非常に奇妙だが、たしかにそれは心のはたらきの一つであるように思われる。計算主義的ではない心的理解という考えも、一考の余地はありそうである。

参考文献

Crane, Tim, 2001, *Elements of Mind: An Introduction to the Philosophy of Mind*, Oxford University Press.

〔植原亮訳, 2010『心の哲学：心を形づくるもの』勁草書房. 〕

Dennett, Daniel, 1982, “Beyond Belief”, in Andrew Woodfield (ed.), *Thought and Object: Essays on Intentionality*, Oxford, New York, Clarendon Press, pp. 1–95.

Fodor, Jerry, 1987, *Psychosemantics*, Cambridge, Mass., MIT Press.

Kripke, Saul, 1982, *Wittgenstein on Rules and Private Language: An Elementary Exposition*, Cambridge, Mass., Harvard University Press. 〔黒崎宏訳, 1983『ウィットゲンシュタインのパラドックス：規則・私的言語・他人の心』産業図書. 〕

McDowell, John, 1987, “In Defence of Modesty”, rep in his, 1998a, *Meaning, Knowledge, and Reality*, Cambridge, Mass., Harvard University Press, pp. 87–107.

——, 1998b, *Mind, Value, and Reality*, Cambridge, Mass., Harvard University Press.

Philie, Patrice, 2016, “Intentionality and Content in McDowell”, in *Metaphilosophy*, vol. 47, nos. 4–5, pp. 656–78.

Putnam, Hilary, 1981, *Reason, Truth and History*, Cambridge; New York, Cambridge University Press.

〔野本和幸他訳, 1994『理性・真理・歴史：内在的実在論の展開』法政大学出版局. 〕

Quine, Willard Van Orman, 1960, *Word and Object*, Cambridge, Mass., MIT Press. 〔大出晃他訳, 1984『ことばと対象』勁草書房. 〕

Searle, John, 1983, *Intentionality: An Essay in the Philosophy of Mind*, Cambridge, Cambridge University Press. 〔坂本百大他訳, 1997『志向性：心の哲学』誠信書房. 〕

Thornton, Tim, 1998, *Wittgenstein on Language and Thought: The Philosophy of Content*, Edinburgh,

Edinburgh University Press.

——, 2004, *John McDowell*, Chesham, Acumen.

Wittgenstein, Ludwig, 1953, *Philosophical Investigations*, 4th edition in 2009, Chichester, Wiley-

Blackwell. [藤本隆訳, 1976『ウィトゲンシュタイン全集8』大修館書店.]

鬼界彰夫, 2003『ウィトゲンシュタインはこう考えた』講談社現代新書.

——, 2018『『哲学探究』とはいかなる書物か：理想と哲学』勁草書房.

（おがわ・ゆうすけ 筑波大学大学院人文社会科学研究科在学）